

(2025年 秋田県公立入試 類似)

- (2024年 群馬県公立入試 類似)

(2020年 群馬県公立入試 類似)

- (2020年 高知県公立入試 類似)

- た。

(2025年 徳島県公立入試 類似)

- 模な新田開発が進められた。

(2023年 三重県公立入試 類似)

- #### 4. 樂市令（樂市・樂座）

(2022年 岐阜県公立入試 類似)

- を授かり、朝貢の形式をとって貿易を行った。

(2019年 秋田県公立入試 類似)

- #### 4. 豊臣秀吉

福岡県公立入試 類似)

- から口分田を与えられて6年ごとに班田収授の法に従った。

(2019年 沖縄県公立入試 類似)

- #### 4. 脱穀のために、歯の間に稲を通す 千歯扱の活用

(2015年 鹿児島県公立入試 類似)

- #### 4. 源義経と応仁の乱

(2016年 福岡県公立入試 類似)

- #### 4. 殖産興業

(2025年 群馬県公立入試 類似)

- 、本拠地である館のほかに勝手に城を構えてはならないという禁止事項が記されていた。

答え合わせ・解説

問1	答え 1 中継貿易	生産地と消費地を直接結ぶのではなく、地理的な中心地となる場所で物資を預かり、他の地域へ運んで販売する形式を中継（なかつぎ）貿易と呼びます。琉球王国は、まさに「万国津梁（世界の架け橋）」として、地域間の物資の循環を担う役割を果たしていました。
問2	答え 3 中国の皇帝に貢物を贈る朝貢貿易を行いながら、17世紀初めからは日本の薩摩藩による支配も受けるという、独自の二重の支配体制の中にあった。	琉球王国は、地理的条件を活かした中継貿易で栄えました。1609年に薩摩藩（島津氏）の侵攻を受けて以降は、日本の支配下に入りつつも、中国（明・清）との朝貢関係も継続するという複雑な国際関係を維持しました。首里城には中国からの使者を迎えるための施設など、この二重の外交関係を象徴する構造が見られます。
問3	答え 4 銅銭	室町時代の日明貿易では、日本は明から生糸や絹織物のほかに、大量の銅銭を輸入しました。当時の日本は自ら貨幣を鑄造していなかったため、明から輸入された永楽通宝などの銅銭が国内の流通貨幣として広く使われ、貨幣経済の発展を支えました。選択肢にある金、硫黄、刀剣は、日本から明へ輸出された主な品目です。
問4	答え 1 島津氏が率いる薩摩藩の侵攻を受け、その支配下に入れられた。	琉球王国は、1609年に九州の薩摩藩（島津氏）による軍事侵攻を受けました。これ以降、琉球は中国（明や後の清）との朝貢関係を継続して王国としての体裁を保ちつつも、実質的には薩摩藩と江戸幕府の支配下に組み込まれるという、複雑な二重の外交・支配体制を経験することになります。対馬藩は主に朝鮮との外交を担っていたため、琉球とは関係が異なります。
問5	答え 1 牛馬の利用や水車の普及、二毛作の広がりによって農業生産力が向上し、農民の結びつきが強まった。	室町時代には、牛馬や水車の利用、二毛作の普及によって農業の生産力が大きく高まりました。これにより農民の経済的・社会的な力が強まり、惣と呼ばれる自治的な村が形成されました。千歯こきや大規模な新田開発は江戸時代の出来事です。
問6	答え 4 楽市令（楽市・楽座）	織田信長は城下町の経済を活性化させるため、従来の「座」による販売の独占権や特権を否定しました。これにより、座に属さない新しい商人の参入を促し、市場での自由な取引を認める「楽市・楽座」の政策を推し進めました。これは旧来の特権階級である寺社などの経済基盤を弱める狙いもありました。
問7	答え 4 明の皇帝から「日本国王」の称号を授かり、朝貢の形式をとって貿易を行った。	義満は経済的な利益を重視し、明の皇帝に臣下としての礼をとることで「日本国王」として認められました。これにより、幕府が貿易の実権を独占し、莫大な利益を背景に強力な権力を行使することが可能になりました。
問8	答え 1 足利義満	室町幕府の第3代将軍である足利義満は、明の皇帝から「日本国王」の称号を授かり、公式な貿易を開始しました。当時、日本国内では貨幣が鑄造されていなかったため、明から輸入された明銭（永楽通宝など）が、国内の商業取引において主要な通貨として流通しました。選択肢にある平清盛は平安時代末期に日宋貿易を推進した人物であり、時代が異なります。
問9	答え 1 寄合と呼ばれる会議を開いて村独自の掟を定め、水利の管理や領主への交渉に団結してあった。	惣では、村の重要な事項を決定するために「寄合」という会議が開かれ、そこで決まった「村の掟」に従って行動しました。選択肢にある「口分田」は古代の律令制、「地券」は明治時代の地租改正、「連帯責任」を負わされた組織は江戸時代の五人組に関する説明です。
問10	答え 3 米を収穫した後の田で、裏作として麦などを栽培する二毛作	鎌倉時代に西日本から始まった二毛作は、室町時代には全国へ普及しました。これにより、同じ耕地から一年に二種類の作物を収穫できるようになり、民衆の生活を支える食料生産が増加しました。二期作は明治時代以降に高知県などで盛んになった手法であり、千歯扱は江戸時代に普及した道具です。
問11	答え 2 源頼朝と応仁の乱	1192年に朝廷から征夷大将軍に任じられた源頼朝は、武家政権である鎌倉幕府を確立しました。一方、1467年に発生した応仁の乱は、室町幕府の将軍の跡継ぎ問題や細川氏・山名氏といった有力な守護大名の対立が複雑に絡み合って起こったもので、この乱を境に時代は戦国時代へと突入することになります。
問12	答え 1 酒屋・土倉	室町時代の経済発展に伴い、本来は製造業である酒屋や、物品を預かる倉庫業であった土倉が、蓄えた資金をもとに高利貸し（金融業）を営むようになりました。幕府は彼らに営業の独占権などの特権を与える代わりに、「酒屋役（さかややく）」や「倉役（くらやく）」といった税を課し、幕府運営の重要な資金源として活用しました。
問13	答え 3 家を売却した際に村へ一定の金を納めることや、掟に違反した者を宮座から除名するといった、村独自の罰則が含まれていた。	惣村で定められた「村の掟」は、幕府や守護などの支配者から与えられたものではなく、農民たちが自分たちの村を守るために自主的に作成したものです。掟には、村の重要な構成員である「宮座」からの除名や、財産の売買に関する手数料の徴収といった、村の自治機能を維持するための厳しい罰則が含まれていました。これにより、惣村は裁判や警察の機能も一部自ら担う「自治」を実現していました。